

1. 日時：2016年6月22日 9:30～15:30

2. 場所：ボルチモア（米国）M/V Cape Washington

3. 参加者：

Convener: Il-sup Shin (KOMERI)

KATS: Sei-chang Lee (TC8/SC2/WG3 Convenor), Su-yeon Oh (KOMERI), Seong Hwan Min (KOMERI), Young Hoon Seo (SPECS)

ANSI: Thane Gilman (TC8/SC3 Secretariat), David Condino (TC8/SC2/WG4 Convenor), Carolyn E. Junemann (USDOT Maritime Administration)

日本からの参加者は、吉田氏（SC2 議長）、坂本氏（MHI マリンエンジニアリング）、小松氏（湘洋エンジニアリング）、千田、斎藤、矢加部及び松本（船技協）

4. 議論の概要

■規格の構成について

会合前に配布された、Part 1 のドラフト（韓国作成）については、その内容が初版から大きく変更され、軸馬力計そのものを規定するのではなく、軸馬力計をチェックする試験方法を規定するものとなっていた。一方、日本側で用意したドラフトは、軸馬力計を規定する内容となっているため、同じ規格番号のもと、Part で分けることが適切なかどうか、議論をした。韓国側は、別の規格番号を付した方が良いと発言したが、Gilman 氏及び Lee 氏より、Shaft power meter についての規格が複数あるのは混乱のもとであるとの意見があり、同じ規格番号のもと、Part 1 から Part 3 として開発することとなった。

また、矢加部及び Gilman 氏から、全てのタイプの軸馬力計を網羅する一般要件を作成することを提案した。議場外で聞くところによると、韓国側としては、提案する試験方法が規格として発行されれば十分であり、それ以上の取り組みをする気はないということであった。

■韓国提案について

6/15 付のドラフト（ISO/TC8/SC2/WG8 N4）をベースに議論した。また、実験室を撮影したビデオも使用された。

- ・軸馬力（Shaft horse power）ではなく、軸出力（Shaft power）を基本単位として使うべきであることが合意された。
- ・実験室で試験を行った後、実際に船に装着する際には、新しい別のひずみゲージを使うことになり、そこで生じる誤差については、ひずみゲージ毎の校正係数があり、貼付の際に電気信号を確認することから、問題ないということであった。その手順については、現在のドラフトには記載されていないため、追記するよう求めた。
- ・ドラフトは、どのタイプの軸馬力計にも適用可能であるという前提で作成されていたが、光反射式及び膜振動式の場合、軸径に合わせた調整を行う必要があるため、実験室で試験をする場合、ドラフトで想

定されている細い軸ではなく、大きな軸径とトルクを発生させる必要があるため、適用できない旨、説明した。Part 1 は、ひずみゲージ式のみを対象とすることとなり、SC2 に対し、タイトルの変更を提案することとなった。

■光反射式及び合金膜振動式について

会合前に提出したドラフト及び Form 4 をベースに、規格内容について説明した。

- ・ 単位系を統一するよう指摘があり、SI 単位を基本として、修正することで合意した。
- ・ 軸馬力を表示するディスプレイについて、規格に含めるべきかどうか疑問が出た。検討する旨、回答した。
- ・ Marking and documentation については、取扱説明書やキャリブレーションの結果等は、船上に備付すべきであるが、マーキングについて、規定は不要とコメントが出た。

Form 4 の修正については、添付のとおり。

WG は、Part 1 については案文を作成して WG 内で回章すること、Part 2 及び Part 3 については、NP 投票を開始することに合意した。